園のおたより

第　９　号

令和５年１２月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

クリスマス

園長　関　由紀子

12 月といえばクリスマス。どの教室もクリスマスムードいっぱいです。まつぼっくり、どんぐり、芋のツル、ローズマリーなどの緑の葉っぱ、様々な色やかたちの木の実などの自然素材、ダンボールや折り紙、キラキラモールなどの身近にあるものを使って、どこにもないオリジナルの素敵なクリスマスグッツが完成しました。「園長先生、見て！」と、みんな自慢そうに出来上がった作品を見せてくれます。ある日、A ちゃんから「クリスマスにどんなプレゼントが欲しい？」と聞かれました（なんと答えたかは内緒です）。A ちゃんは幼稚園の大人にどんなプレゼントが欲しいか、一人ひとりに聞いていたのです。サンタクロースは子どものもの、と思っていましたので、大人のサンタクロースになってくれる A ちゃんの言葉にちょっとびっくり、そしてとてもうれしくなりました。

この出来事を我が娘に話すと、「随分楽しそうね。私の子育ては随分手を抜いていたのにね」と言われました。「そんなことはない、全力投球だったよ」と伝えてみましたが、本当に全力投球したことが 1 つあります。それがクリスマスです。娘がサンタクロースの存在にそろそろ疑問を感じる頃、12 月に友人を訪ねてイギリスの田舎を訪れたことがありました。そこで遭遇したイングランド国教会のクリスマスイベントを体験し、娘はサンタクロースの存在を固く信じるようになりました。その信念を維持するために、親は全力投球したのです。天井まであるもみの木の代わりに、大きな展示用のプラスティックのツリーの値下げ品を偶然見つけ、夫と担いで帰り飾り立てました。暖炉と煙突の飾り付けの代わりに、サンタクロースが入ってくると思われるベランダに通じる窓を飾り立てました。トナカイ用の特別な餌を庭に撒く代わりに、ベランダにトナカイ用のお菓子をお皿に入れておきました。サンタクロースとのやり取りは、教会での出会いではなく、手紙をクリスマスツリーに置くことにしました。そして当日には、サンタクロースに頼んだプレゼントと手紙がクリスマスツリーの下に届き、大きな靴下には外国製のお菓子がたくさん入っています（数年後、娘のサンタクロースへの手紙には「日本のお菓子にしてください」と書いてありました）。この行事は、娘が小学 6 年生の時のクリスマス大事件を乗り越え（この事件のお話は来年のクリスマスに）、プレゼントをあげる方になる頃まで続け、そして今はやめてしまいました。

子どもたちの力作と素敵な歌に囲まれて、今年は久しぶりの楽しいクリスマスがやってきます。さらに A ちゃんのお蔭で、プレゼント交換には大人子ども関係なく「お互いを思い、喜びと幸せを分かち合う」という意味があることを確認することが出来ました。皆様はどんなクリスマスを予定していますか。Merry Christmas!

何かを「感じる」こと

先日、３組の人たちが、北浦和公園内にある埼玉県立近代美術館へ見学に訪れました。この時期の美術館見学を始めたきっかけは、１５年ほど前、旅先のフランスやベルギーでいくつかの美術館を訪れた際、名画の前に子どもたちが座り、大人と一緒にやりとりしながら過ごしている場面に出くわしたことでした。附属幼稚園でも、せっかく近くにある美術館を、敷居の高い場所ではなく、身近な場所として出会うきっかけが作れないかと考え、当時の美術館の職員の方や教育学部の美術に関する大学の先生に相談をしました。快く引き受けてくださり、５歳児向けの美術館見学の内容をつくっていただくことができました。実際に、幼稚園の職員も数名同行するのですが、作品との出会い方に引き込まれるような時間です。ここ数年は、感染症拡大の状況で、様々な公共施設の利用に制限がありましたが、県立近代美術館では、プログラムの内容を精査しながら、本園からの美術館見学を継続して受け入れていただきました。ゆったりとした空間と時間の中で、子どもたちの思いがけない感じ方を丁寧に引き出してくださり、毎年、素敵なひとときとなっています。

幼稚園教育は、５つの領域（※領域とは、子どもたちの育ちを見る窓のようなものです）があるのですが、その一つが、「表現」という領域で「感性と表現に関する領域」と、幼稚園教育要領に示されています。子どもたちが音楽や造形や身体や言葉などで表現する姿と並行して、子どもたちの感性、子どもたちが何かを「感じる」ことを大切にしていきたいという考えが、ここに表れています。海洋生物学者のレイチェル・カーソンによる著書『センス・オブ・ワンダー』（訳：上遠恵子）の中に、次のような一節があります。

“子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは、「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。”

幼児期において（幼児期に限ったことではないかもしれませんが）、その人が何かを「感じる」ことが十分に保障されていることは、とても重要なことでしょう。詩人の茨木のり子さんの作品には、『自分の感受性くらい』という詩があります。誰かに決められるのではなく、「私が感じること」「感じる心をもつ私」を大切にしていきたいと思います。

今年一年、園の教育活動に多くのお力添えをいただき、ありがとうございました。ご家族みなさん、どうぞよいお年をお迎えください。

（副園長）

クラスだより

１くみ

「レスキュー隊出動」

　秋ごろから芝生の上を思い切り駆ける心地よさを感じて遊ぶことが増えてきました。大人や友達と一緒に誘い合って追いかけっこをしたり、かくれんぼをしたりしています。11 月にはわらべ歌の「あぶくたった」をみんなで歌ってみて、「おばけの音！」の掛け声に合わせて逃げたり捕まえたりする遊び方をやってみました。歌をみんなで一緒に歌うと、不思議な一体感が生まれて面白いです。「おばけ」という言葉にワクワクする人もいるようです。

　また、レスキュー隊のイメージをもって遊ぶ姿がありました。フェルト地のヘルメットを被り、ホース（水色のすずらんテープが付いています）を手にして、イメージの中で火災を消火したり、逃げ遅れた人を助けたりします。面白そうな雰囲気を感じて集まってくる人もいます。ヘルメットとホースが仲間の証で、身につければレスキュー隊に入隊できます。後から加わった人もどのようなイメージで遊んでいるのか、友達のしている動きから感じ取って同じように動いてみたり、「あっちに泥棒がいます」というように自分のイメージを、言葉で遊びの中に投影させたりしていきます。

　遊びに興味をもって加わる人が増えると、レスキュー隊の活動の幅は広がっていきました。救助活動だけでなく、泥棒やおばけを捕まえるようになったのです。泥棒役になった人を追いかけてみたり、レスキュー隊でないと見えないおばけを追いかけたりしました。その遊び方は逃げる役と捕まえる役が反対ですが、「あぶくたった」のようでした。遊びのイメージは内から生まれてくるだけでなく、様々な外の世界に触れ、自分の中に取り込み、繋がっていくものなのだと感じました。年が変わり３学期にはまたどんな遊びが生まれるのか、楽しみです。

２くみ

「友達のつぶやき」

遊びや生活の中で友達と過ごすことが増え、友達のつぶやきをきっかけに遊びが始まる場面が見られるようになりました。ある日、砂場で先生と一緒に大きな穴を作り始めた人がいました。それに気付いた人が「何してるの？」と聞くと、「落ち葉のプールを作るんだよ」とつぶやいて教えてくれ、一緒に穴を掘り始めました。それを見た他の人も集まってきて、「落ち葉のプールを作ってるんだよ」と新しくきた友達に教えながら、みんなで大きな穴を作っていきます。穴が出来上がると、次はプールの中に入れる落ち葉探しです。水遊び場にたくさん落ちているコブシの葉に気付き、それを使うことにしました。みんなで落ち葉を集めていると、素足だった人の「落ち葉を踏むと気持ちがいいよ」というつぶやきをきっかけに、みんなで素足になってみることに。素足になり、みんなで落ち葉の心地良さを共有しながら落ち葉集め再開です。一度にたくさん運ぶためにカゴをドクターイエローに見立てて、たくさん運んでくれる人が現れたり、「プールだから水も入れるでしょ」とつぶやきながらバケツで穴の中に水を運んでくれたり、みんなで力を合わせながらコブシの葉と水をたっぷり使った落ち葉のプールが完成しました。

また、“プール”から“温泉”を連想した人は、近くで足を砂に埋めて砂風呂を作り始めました。「ここは砂のお風呂なんだよ」とつぶやいて、全身に砂をかけて寝転ぶと、それを見て、目をキラキラさせながら同じように全身に砂をかけてみたり、出来上がった山にうもれてみたり、ダイナミックに砂と関わることを楽しんでいました。友達の姿やつぶやきを自分の中に取り入れてみることで、自分の中にはなかったアイデアに触れられたり、普段よりも大胆に遊ぶことができたり、お互いに影響を与えながら、新たなことに挑戦するきっかけになっているのだと思います。

生活の中でも、後から集まってくる友達のことを「10 数えながら待っていようよ」というつぶやきと共に、数を数えながら待っている姿があります。先にいた人たちもみんなが揃って嬉しい、後からの人も待っていてもらったことが嬉しい気持ちを感じているようです。自分のことも、友達のことも大切にしながら過ごせるよう、3 学期の生活も子どもたちの思いやつぶやきを大切にしていきたいと思います。

３くみ

「自然と共に」

２学期には、栽培してきた宝ものが、たくさん実りました。藍、枝豆、サツマイモ・・。藍は、葉や花でたたき染めをしたり、Ｔシャツを染めたり、種を収穫して、種やさんをしたりしました。枝豆は、蒸してみんなで食べたり、大豆になってから収穫したりしました。サツマイモは、ツル切りをして、そのツルで綱引きをしたり、縄跳びをしたり、電車ごっこをしたりして遊びました。また、その時作ったリースに、ヒノキやローズマリーやコノテガシワを挿して木の実を飾り、クリスマスのリースを作ってお部屋に飾りました。それから、ふかし芋から始まって、スイートポテトや大学芋も作って美味しく食べました。ミントなどのハーブは、水に浮かべるとよい香りがしたので、自然観察園のはっさくやキンカンを入れたハーブ水をみんなで飲みました。

園庭では、場を作ってごっこ遊びをしました。ぽかぽかとしたおひさまが、冷たい風をほんのりあたためてくれて、気持ちよく過ごしました。土と水を混ぜたらコーヒーのように美味しそうだったので、飲んだつもりになってホッと一息ついて芝生のおうちで過ごしました。ごはんとおかずは、つやつやした紅い葉とギザギザの緑の葉、白い花びら。時には、土に水を少しずつ混ぜて、とろとろになるようにして、みたらし団子を。テラスでは、森の木が、形を変えて旅をしているように、小屋になったり、小さな家のテーブルや遊び場になったりしました。３組の妖精たちは、箒に乗っていろいろな宝ものを見つけました。香りのする葉や美しい花を混ぜて『ようせいのおくすり』を作りました。日ごとに色が濃くなっていったので、魔法を使ったのかもしれません。

今を夢中で生きる子どもたちは、自分の一日の中で、何度「あぁ楽しい」を感じたでしょうか。作ること、恵みをいただくこと、創造することは、自然と共に暮らしていることを実感し、子どもたちの遊びの中に溶け込み、身体をゆるませて、心を開いて、なんとも心地のよい毎日でした。